

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

エデンより彼方に

配給/ギャガ・コミュニケーションズ Gシネマグループ

2003 (平成15) 年5月28日鑑賞

<ヘラルド試写室>

Data

監督: トッド・ヘインズ

出演: ジュリアン・ムーア/デニス・クエイド/デニス・ヘイスバート/パトリシア・クラークソン

👁️👁️ みどころ

1950年代の「古き良きアメリカ」の上流家庭における理想的な「良妻賢母」をジュリアン・ムーアが演ずる。何の不自由もなく幸せいっぱいのお母さん家庭のはずだったが、夫が持っていたある「秘密」、そしてヒロインと黒人男性との心の交流が悲劇を引き起こす。考えさせられることが多い名作だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<1950年代の古き良きアメリカ>

1950年代のアメリカは、第2次世界大戦と太平洋戦争の戦勝国として圧倒的な繁栄を誇っていた。この映画はそんな時代のアメリカが舞台。1957年の秋、コネティカット州ハートフォードというまちで、キャシー・ウィテカー（ジュリアン・ムーア）は、上流家庭の主婦として、幸せな生活を送っていた。夫のフランク・ウィテカー（デニス・クエイド）は、一流企業の重役として社会的に十分な信用と収入を獲得。緑に囲まれた立派な庭つきの邸宅に住み、夫はマイカーで通勤し、妻はよく働く若い黒人のメイドを優しく使いながら、家事をパーフェクトにこなしていた。また、キャシーはよき妻であるばかりではなく、2人の子供たちにとって良き母でもあった。

キャシーの家の周辺は同じような上流家庭が多い。したがって、地域社会としてのコミュニティが強く、奥さん同士の交流（おしゃべり）や社交活動も忙しかった。このような1950年代のアメリカの上流社会のモデルの中で、キャシーは「良妻賢母」として自分のつとめをきっちりと果たしている典型的・理想的な女性と考えられていた。アメリカは、一見、「男女平等の国」、「自由の国」と思われているが、実は、このように非常に保守

的な国なのだ。

<理想的な夫の内面に潜むモノ>

ある日、警察から、「フランクが酒に酔い、トラブルをおこし、保護された」との電話が入った。驚いたキャシーはすぐにフランクの身柄を引き受け、事無きを得たが、実は、これは幸せな家庭崩壊の前兆だった。

フランクは、テキパキと仕事を処理する仕事人間。連続するランチ・ミーティング、そして夜の打ち合わせも忙しい。ある日遅く、やっと会議を終えスタッフと別れて、ひとり家路につこうとしたフランクは、なぜかブラリと映画館に入った。その後、さらに、ひとりで入ったのは怪しげなバー。客はひとりで来ている男ばかりだ・・・。

このように(?)、フランクは毎日仕事づくで忙しい。今日もキャシーは、夕食を一緒に食べようと子供たちと共に夫の帰りを待っていたが、「今日も遅くなる」と電話がはいった。いったんは、夫の夕食を捨てようとしたが、連日の疲れを少しでも慰めようとキャシーは、夕食を会社に届けようと思立った。「たまにはちゃんとした夕食を食べないと・・・」と願ったキャシーは、お弁当にした夕食を持って夫が残業している会社へ向かったのだ。そして、夫の執務室のドアを開けた時、そこでキャシーが見たものは・・・。

<夫婦は破綻するのか、持ち直すのか>

キャシーは賢明だ。夫の危機は自らの危機、家族の危機と考え、夫の立ち直りのため最善の行動を取った。そして、フランクもキャシーの勧めを受け入れて、病院通い。強い意志で「自分の病氣」にうち勝つと宣言した。が、しかし・・・。

恒例のフランク家でのホームパーティーは隣人の「親友」たちの協力もあって、今年も「大成功」に終わったが、その内実は・・・。

さらに、毎日のように悩み、イライラするフランクは、仕事上でも前のようにうまくいかず、遂に休暇命令が・・・。

しかし、キャシーは、この休暇命令も前向きに考えよう、と夫を励まし、2人で楽しい(?)バカンスへ・・・。

<例によって・・・黒人差別問題>

キャシーは人種差別撤廃論者でもなければ、もちろん「アカ」でもない。ただ、周りの人たちすべてに優しく、自然に振る舞っているだけだ。そんなキャシーは、幸せなアメリカの家庭を代表する主婦として、新聞社の取材を受けた時、ふと庭を横切った黒人男レイモンド・ディーガン(デニス・ヘイスバート)の姿を目に止めた。彼は、ウィテカー一家に親子二代にわたって雇われている庭師だ。ふとしたことで、レイモンドと口を交わしたキャシーは、レイモンドは妻と死別し、今は可愛い11歳の娘との2人暮らしであると聞き、

彼の誠実で暖かい人柄を直感した。

そして、絵画の展示会でのレイモンドとの偶然の出会い。レイモンドの持つ絵画の知識やその視点の素晴らしさに、キャシーは思わず話し込んでしまった。さらに、夫との問題で悩み、思わず泣きながら家を飛び出したキャシーを見つけて、これを慰めたのがレイモンド。レイモンドはキャシーの気分転換を図るため、まちな出ようと誘った。レイモンドの車に乗ったキャシーは、レイモンドと共に森を散歩し、レイモンドの行きつけのバーに入り、何とそこで一緒にダンスまで・・・。

レイモンドと一緒にであれば、黒人ばかりのバーの中に1人白人女性がいても違和感を持たないこと、そしてレイモンドと話していると心が解き放たれ、不思議な安らぎを覚えることにキャシーは驚いていた。

ところが、これは大変な事件になってしまった。こんな2人を目撃したのは、地域社会のどこにでもいる、ゴシップ好きのおしゃべりオバサン。このオバサンが広めるキャシーとレイモンドの噂は、閉鎖的なハートフォードのまちなあつという間に広がった。そのため子供のバレエの発表会では、子供やキャシーに対して急に白い目が・・・。夫フランクも血相を変えて家に飛び込んできた。

キャシーにとっての自己を解き放つごく自然な行動は、1950年代のアメリカ白人社会の常識から大きく逸脱した、「反社会的」な行為だったのだ。

＜ヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画＞

1950年代の古き良き時代のアメリカにおける典型的な上流家庭の主婦キャシーをヒロインとして描いたこの映画は、まるでジュリアン・ムーアのためにつくられた映画のよう。年齢からいってもピッタリのはまり役だ。上流家庭の「良妻賢母」であり、かつ地域社会に貢献する活動的な女性でありながら、夫との確執に悩み、さらにレイモンドとの関係に悩むヒロインを見事に演じている。2003年第75回アカデミー主演女優賞にノミネートされたのも当然だ。

実は、2003年第75回アカデミー主演女優賞は、『めぐりあう時間たち』のニコール・キッドマンが獲得したが、ジュリアン・ムーアは、『めぐりあう時間たち』でも、3人の主役の女性の1人を演じている、今が旬の大女優だ。

1950年代のフランク一家が住む邸宅も見事だし、そのまちな並みも素晴らしいが、ジュリアン・ムーアが見せる1950年代のアメリカ女性のファッションも素晴らしい。赤を中心とした華やか色彩や豊かな胸を強調し、腰から下を大きくフワリと広がるスカートで包んだキャシーの姿は、まさに1950年代のアメリカの上流階級の女性の美しさそのものだ。

男の私でもこれ位わかるのだから、女性ファッションに興味のある人は、そのファッションだけでも大いに楽しめるだろう。

＜メロドラマの行方は・・・＞

この映画はある意味では、1950年代のアメリカの上流家庭の主婦のメロドラマだが、そこで興味があるのは、

第1に、フランクとキャシーの夫婦仲はどうなるのかだ。これについて、映画ではフランクからはっきりとした決断が示されるので、これに御注目。

そして第2は、キャシーとレイモンドとの「仲」はどうなるのかだ。これはわりと常識的。後述のキャシーのモデルとなった小説とは多少違うようだ。これも映画を観てのお楽しみ。

＜勉強ネター3題＞

この映画で勉強すべきことは多い。

第1は、ホモセクシャル（同性愛）のこと。パンフレットによると、フランクがブラリと立ち寄った映画館で観た映画は、多重人格に悩むヒロインを描いた『イブの三つの顔』という作品とのこと。今でこそ、アメリカは同性愛（者）も市民権を得ている（？）らしいが、1950年代のアメリカでは、同性愛（者）は、それが発覚すれば人生が破滅に追いやられかねない「深刻な症例」として受け止められていたとのことだ。

第2は、黒人（差別）問題。この映画の舞台となっているコネティカット州ハートフォードというまちは、黒人の数が比較的少なく、1950年代、人種対立は激化していなかったが、既に「リトルロック事件」は発生していた。また、「黒人の地位向上のための委員会」など各種の組織が生まれ、署名活動やボランティア活動が展開されていた。映画でも随所にあらわれる「ニグロ差別」は、いわばアメリカの上流白人社会では常識だったわけだ。このような当時のアメリカの人種問題についての社会的な背景を十分認識する必要がある。

第3に、この映画で描かれるキャシーと黒人男性レイモンドとの心の交流そして愛情への発展というストーリーにも、サークの『天はすべてを許し給う』（1955年）という原作があるとのこと。この作品は地方都市の裕福な未亡人が、親子二代で庭を剪定している男性と恋に落ちるものの、身分違いから周囲の偏見にさらされ、世間体を気にする子供たちから猛反対されて、いったん身を引くものの、子供たちは街を出ていってしまう。そして、コミュニティーでのうわべだけの社交生活とその底無しの空虚さに気づいた2人は、その愛を確認するという物語、だそう。上流階級の白人の女性が、庭師の黒人男性と心を通じ合い、恋に落ちるなどという（メロ）ドラマも、例外的なケースとして本当にあったのかもしれない・・・。

2003（平成15）年5月29日記